

『文献通考・経籍考』に関する一考察

— 分類の修正とその学術的意味について —

連

凡

はじめに

『文献通考』は宋末元初の著名な歴史家である馬端臨（字は貴與、一二五四〜一三二三）が撰した、上古から南宋寧宗嘉定年間までの典章制度沿革通史である。全書は三四八巻で二四門に分かれる。その第十八門の『文献通考・経籍考』（以下、『経籍考』と略称）は、馬端臨が杜佑の「因仍」（踏襲継承）思想の影響を受けて『通典』の体裁を継承する一方で、その内容上の不備を補充するために立てた五つの新しい門類の一つであつて、全七六巻、最大の門で、単行本がある唯一の門類でもある。『経籍考』は經史子集の四部に分かれて五五類がある。その下に「近世に存して考ふべき」^①歴代典籍を約四二〇〇種以上著録している。一方で、馬端臨は鄭樵の「会通」（融会貫通）の思想を承けると同時に、その『通志』における取材の狭窄と編纂の粗雑を避けるために、晁公武の『郡齋読書志』、陳振孫の『直齋書録解題』（以下、『郡齋』、『直齋』と略称）の二つの宋代私家提要目録書を主体として、『漢書・芸文志』、『隋書・経籍志』、『新唐書・芸文志』（以下、『漢志』、『隋志』、『新唐志』と略称）、及び宋代の四種の『国史芸文志』^②、宋代官修の『崇文總目』（以下、『崇文』と略称）、私修の『通志』^③『芸文略』（鄭樵）及び各家の専門書・文集・語録とその序跋など、幅広い資料を収録してきちんと整理し、さらに少量の自身の言葉（約五〇条の按語）を加えることによって、「輯録体」（王重民の命名による）^④という新しい目録書体裁を創立している。これは自分で書いたものではなく、主として

前人の資料を集録して、著録（書名、巻数）、序録（學術の源流や歴代典籍の整理、収蔵情況など）、解題などを作つたものである。「經籍考」は特に清代以降の學者に重視され、多くの模倣と続修の著作（朱彝尊『經義考』、孫詒讓『溫州經籍志』、清代官修『續文獻通考』「經籍考」など）が現れ、中国目錄學史上において重要な地位を占めている。

『經籍考』は輯録体の目錄書として、豊富な資料を収めることによって特に重視されているが、分類上においても完全な体系と特色を持つている。従来、これに対してはすでに様々な論考があるが、⁵⁾ おおむね分類体系に関する巨視的分析である。前代書目の分類に対する修正については、なお全面的な研究を行う必要がある。本稿では、『經籍考』全文とその来源である資料とを比較し分析することによって、その輯録体の編纂方式による分類体系上における総合性に注目した。そして、『經籍考』における分類体系と圖書の分類に対する修正を合わせて分析し、その原因と根拠を究め、更にその背後にある學術思想を探索することによって、『經籍考』の特質を究明するための一助としたい。

一 書籍分類の過程とその要素について

古籍分類の過程とは簡単に言えば、分類者を媒介者として、あらゆる書物を一定の分類体系に類別する過程である。分類者はもちろんその行為の主体であるが、分類体系は分類者に対して一定の制約作用を持つ。書物はもともと客観的に存在しているが、分類者はそれに対して解読と評価の作用を持つ。分類体系は実に書物全体に基く學術門類の構成情況によって決められるが、逆にその分類の排列次序や書物に対する評価などによって、それに対して學術地位や流伝などにも影響を与えている。その上、分類体系、分類者、書物はみな特定の時代の學術空間に属している。

「分類体系」は言うまでもなく一定の数目的分類項目で構成された有機体である。中国の歴史上、古籍分類は「六分法」（「漢志」）、「七分法」（「七志」）、「十二分法」（「通志」）、「芸文略」などの体系もあるが、『隋志』以来「四分法」（「四部分類」）が分類体系の主流になる。ただ、各部の細かな分類項目は時代によって絶えず變化した。「分類者」については、その時代の客観的制約を受けている一方で、その學識と思想などの個人的背景によってその問題を處理する角度

と立場は非常に異なり、様々な人為的な過失も免れないのである。「書物」はもちろんその時代までのあらゆる書物であり、その数量も何千何万種に達し、その内容と伝播は非常に複雑多端である。古籍の分類は一般的に書物の内容に基くので、書物の内容とその真偽、地位と流伝などが特に重視されている。「特定の時代の学術空間」は、その時代の政治・経済・文化と学術思想などを背景として、分類体系、分類者、書物に影響を与えてそれらを決定する深層の原因と根拠である。以上の三者とその時代の学術空間は、分類の過程における四つの重要な要素として複雑な相互関係がある。これらの要素が変われば、往々にして分類の過程における相違と修正をもたらすことになる。以下、「経籍考」とその材料来源の統計によって具体的に説明したい。

『経籍考』には約一四〇家（特に南宋の学者とその著作を主とする）の六〇七四条の材料（序録、部卷数合計、解題）を輯録している。その中に『漢志』（八八条）、『隋志』（九五条）、『新唐志』（六二条）、『崇文』（一九三条）、『郡齋』（一四三七条）、『直齋』（二八一八条）の六つの書目は合わせて四六九三条を収録し、その分類と内容の主な典拠になっている。『経籍考』における分類の修正もこの六つの書目に対する処理の中に集中的に現れている。ただ、『経籍考』の全文を通観すれば、馬端臨は少量の説明（按語）以外に、具体的書物をその分類体系によって類別したあと、一般的にその過程において前代書目に対する取捨・修正の理由を述べていない。これは資料において限りがあつて一一考証できなかったため、「姑く其の旧に仍る」としたものである。『経籍考』は史志目録として前代書目に対する編集を主とし、明焦竑『国史経籍志』のようなもっぱら前代の書目の誤謬を考証したものではないのである。以下、書目などの関連資料を結合して四つの方面から『経籍考』における分類の修正とその学術的意味について検討したい。

二 分類体系による分類の修正

『文献通考』自序にその「経籍考」における分類項目の数（経部十三類、史部十四類、子部二二類、集部六類）を述べているが、実際の正文内容と比較してみると、多少の違いがある。論述の便のため、ここでは先ず『経籍考』の正

文にある各部の分類項目を見ておく（括弧内は序録の表記）。

經部—易、書、詩、礼、春秋、論語、孟子、孝經、經解、樂、儀注、諡法、讖緯、小学。史部—正史、編年、起居注、雜史、伝記（雜伝）、偽史霸史、史評史鈔、故事、職官、刑法、地理、時令、譜牒（譜系）、目錄。子部—儒、道、法、名、墨、縱横、雜、小説、農、天文、曆算（曆譜）、五行、占筮、形法（天文から形法までを陰陽類に属す）、兵、医、神仙（前に房中あるも書物なし）、釈氏、類書、雜芸術。集部—賦詩、別集、詩集、歌詞、章奏、總集、文史。

実は經部十四類、史部十四類、子部二十類、集部七類で合わせて五五類となる。『經籍考』は『隋志』以来の四部分類体系を採用したが、これは前述の「因仍」の思想の影響によるもので、四部分類体系は前人の成果を吸収するため一番便利だからである。一方で、馬端臨が前代の書目の分類の項目に対して「会通」の立場から行った修正はかなり多い。これによってその分類体系は、前代書目（特に『直齋』）から出た新しい分類がほぼ備わっているという総合性や、朱子学の立場に基づいて特に礼樂教化や夷夏の弁などを重視するという正統性などの特徴を持っている。また、その考え方は往々にして保守的であるが、分類の排列次序などの具体的な処理上においては一定の融通性もある。それは主に項目の設置と排列順序、項目における相互の關係と歴史の沿革などの方面に現れている。

（二） 分類項目の設置とその排列順序

分類項目の設置を決定する要因は、主に時代學術思想の盛衰發展及びそれに伴う特定部類における書物の數量の消長である。もちろん分類者自身の學識と判断も重要な役割を果たす。その上、古籍分類においては、その項目の排列順序は直接その學術的地位を反映している。故に排列順序の変化は、直接的にある類の地位の昇降を現している。四部分類体系においてはもちろん經部の地位が一番高く、その次は史部、子部であり、集部の地位は一番低いと見なされている。更に各類における下位の分類も一般的に前に列されている類別は後にある類別より地位が高いのである。

以下、『經籍考』經部樂類（第十位）と儀注類（第十一位）などを例として論述したい。

陳振孫は上古の「六芸」に属された楽類の書はすべて逸失しており、後世の楽書（樂府、教坊、琵琶、羯鼓など）を經部楽類に入れることはできないと判断して、經部の楽類を廢止し、それに代わって子部雜芸術類の前に音楽類を設けて後世の楽書を入れた（鄭寅『鄭氏書目』に基く）。これに対して馬端臨は陳氏の意見を受け入れる一方で、然れども楽なる者は、国家の大典、古人以て礼と並稱す。而るに陳氏『書録』に則ち之を諸子の後に置きて、之を技芸の間に備す。又たただ倫せず。」⁹と云うように、礼樂の教化作用（雅）を強調して、技術のような雜芸術（俗）に比べることができないと主張した。ゆえに、馬氏は折衷の方法を取り、後世の楽書を經部楽類に保存した一方で、その排列順序（もとは五經に次ぐ第六位）を下げて儀注類とともに經解類の後（經部第十位）に置いた。その後、『四庫全書總目提要』（以下、『四庫總目』と略称）はさらに音楽理論の書を經部楽類に入れ、音楽技法と曲譜の書を子部の雜芸類と集部の詞曲類に入れた。同じように、集部章奏類も、陳振孫は集部別集類から独立して史部詔令類と相い呼応させた。『經籍考』は陳氏によつて集部に章奏類があるが、詔令は起居注類に入れた。後に『四庫總目』はさらに集部章奏類を史部によつて詔令類と合併して詔令奏議類とした。

前述のように、古代から礼樂と合わせて称されているが、三礼（『周礼』・『儀礼』・『礼記』）とその注釈書は後世に残っているから、これを經部礼類に入れるはずだが、後世の儀礼を記録する書物については問題が生じた。漢代の時に儀礼の書はあまり多くないので、儀注類がなくて『封禪議対』、『漢封禪群祀』などは六芸略礼類に配された。時代の發展に伴つて後の朝代の礼書は次第に増加し、故に『隋志』、『旧唐志』、『新唐志』、『崇文』、『郡齋』、『直齋』はみな史部に儀注類（『直齋』に「礼注」と称す）を設けたが、『經籍考』に至つて初めてこれを經部に上げた。その理由は前述の經部楽類に対する処理（国家の大典）と同様である。『經籍考』の処理方法は、經部礼類にただ三礼とその注釈書だけを収録すると同時に、後世の礼書はすべて經部儀注類に収録した。両者の限界は非常に明らかである。後に『四庫總目』は『經籍考』の考え方を継承して更に細分化し、經部に礼類という二級分類を立てて、その下に周礼、儀

礼、礼記の「三礼」の分類を立てると同時に、雜礼書（後世の礼書）、三礼総義、通礼などの分類をも設立した。

(二) 分類項目における相互の關係と歴史の沿革

分類の項目において、横の方向から見れば、各類に關わる學術領域は往々にして關連しており、その間に交錯と重なり合うところがあるから、限界はあまりはつきりせず混同しやすい。鄭樵がかつて挙げた「古今編書の分かつ能わざる所の者」⁽¹⁾という伝記、雜家、小説、雜史、故事の五つの類別はその代表的なものである。したがって同じ書物でも往々にして似通っている分類に取り入れることができる。故に古籍の分類には一定の主觀的あいまい性がある。縦の方面（歴史上）から見れば、時代の學術思想の發展に伴つて、分類の体系と書籍の状況も變化し、分類項目の内包と外延も變つていった。したがつて、歴代書目の間には相違が生まれた。

例えば、歴史上に經解類は孝經類、論語類、小学類、雜家類との間に密接な關係がある。「漢志」では「五經雜議」十八篇、石渠論」という經解の著作を六芸略孝經類に附している。「隋志」でも「五經雜義」六卷、孫暢之撰」といふ經解の著作を經部論語類に附している。その理由は、「孝經」と「論語」とはみな一つの經典に限らず、実は「五經の總彙」であるから、書目にまだ「經解」（「五經總義」）という類を設けなかつた時代に、兼ねて群經を論じる書物は一般的にこれに入れたのである。その後、「旧唐志」（唐毋煗『古今書録』（已佚）に基く）で初めて經部に「經解」という類を設けて、「五經雜義」七卷、劉向撰」といふ書物を記録している。「新唐志」でも同じである。しかし、北宋官修の「崇文」は再び「經解」の著作を孝經類と論語類に付しており、古いときたりに拘泥したと言ふべきであらう。南宋の「郡齋」と「直齋」に至つて、ついに經解類の著録範圍を確立した。「經籍考」はこれ採つた。その上、經解類はその訓詁の解釈方式と錯雜な内容によつて小学類と雜家類とを混同しやすい。例えば、「直齋」子部雜家類に、「匡謬正俗」八卷」を記録し、「崇文」はこれを論語類に取り入れ、「經籍考」は「郡齋」によつてこれを經解類に入れた。「四庫總目」ではこれを經部小学類「訓詁之屬」に入れた。

古籍目録の分類体系は今風の哲・史・文などの完全な学科による分類ではなく、また「十進法」のような形式的分類でもないのである。実は古籍の分類は政治・文化の標準を優先して、学術内容で分類すると同時に、雅・俗・正統・異端などといった他の基準も存在し、非学術的な要素による混乱がかなり多いのである。故に古籍の分類が多重規準に基く錯雑な体系として、その分類項目における交錯は免れないのである。これは古籍分類体系における構造上の欠陥と言うべきである。前述の経部楽類と子部雜芸術類（雅と俗）、また史部の地理類と偽史霸史類（夷夏の弁）の相互関係などはみなそうである。例えば、「直齋」史部地理類に「契丹疆宇図」、「遼四京記」などの宋朝と対立していた政權の地理書を収録したが、馬端臨はその儒家正統の思想に基づいてこれらをすべて偽史霸史類に修正して分類した。

三 分類者による分類の修正

分類者自身の学識と態度はもちろん分類に影響を与える重要な要素であるが、客観的情況、特に時代潮流と書籍情況には制限もあり、多くの無意識的な過失も免れなかった。故に書目の書物分類において多くの違いが生まれた。

(一) 主観的な角度と立場の違い

書物の内容は往々にして複雑で多領域・多方面にわたる。故に同じ書物でも異なる分類者によって、書物の内容、形式、作用など、違う角度から考えてみれば、違う分類に入れることができる。これは金石図録に対する分類の修正に具現されている。「郡齋」経部小学類に「考古図」、「博古図」、「鐘鼎款識」を記録し、「直齋」史部目録類に「考古図」、「博古図説」、「宣和博古図」を記録したが、馬端臨は「経籍考」において両方の分類によらず、これらをすべて経部儀注類に分類した。「考古図」の解題の下に直接その理由を述べている。「按ずるに、「考古図」の諸書、晁氏以て小学の門に入れ、陳氏以て書目の門に入れ、皆其の倫類を失ふ。既に考ふる所の者、古の礼器なれば、則ち礼文の事なり。故に釐めて儀注の門に入る。」と。「郡齋」がこれらを小学類に入れるのは、その文字を考証する作用に着目し、「直齋」がこれらを目録類に入れるのは、その図録の編纂方式に着目したからであるが、前掲のとおり馬端臨は礼楽教

化を重視したので、彼の見たところではこれらの記載の内容は古代の礼器で、「礼文」（礼制）に関わるものであるから、これらを儀注類に分類した。「四庫総目」は「直齋」の考えに従ってこれらを子部譜録類「器用之屬」に入れた。

同じように、法帖は古人の法書（手本）を石や板に模刻し、拓本をとって帖冊にしたものである。例えば「直齋」子部雜芸類に張彦遠の『法帖要録』、陳思の『書苑菁華』などの十三部の法帖著作を記録したが、『経籍考』では以上の書物をすべて経部小学類に分類した。馬端臨も陳振孫が指摘した「書品」のような法帖類の字書は書道の技芸（技術・芸術）に属して学問とは言えないということを認めたが、具体的な処理方法においては違いがあった。彼の見たところでは、「真行草篆」の書といい、「偏旁音韻」の書といい、同様に文字をその対象としており、その重点の置き所は違うけれども、便宜上二つの類に分ける必要はない。従って、彼は陳氏が書道の著作を小学類から分けたやり方に賛同せず、依然としてこれを小学類に保存した。^⑧『四庫総目』は陳振孫の意見に従ってこれを芸術類に入れた。

（二）人為的な過失

以上見た分類体系自体の相違には参酌すべき点があるとしても、古籍目録の編纂における「名を見るも書を見ず」と「前を見るも後を看ず」^⑨とは、典型的な人為的過失だと言えることができる。すなわち分類者（特に官修書目）が書物の内容に対して深く了解することなく、早く完成するために、ただ書名或いは一部分の内容だけによって判断して分類してしまうということである。このような無責任な態度による過ちはどの時代にも存在するが、もっとも多いのは、ただ一時の油断によるものである。特に分類者はうっかり自分自身が定めた規則を破りやすいのである。

例えば、馬端臨は陳振孫のやり方に従って集部別集類から分けて「詩集」という類を設けた。陳氏の分類標準は、「凡その他の文無くして独り詩のみ有るもの、及び他の文有りとも雖も而も詩集復た独り行はるる者は、別ちて二類と為す。」^⑩と言うように、単純な文集或いは詩文合集は別集類に入れ、詩集の単行本であれば詩集類に入れるようにしたはずだが、具体的に分類する際に、その規則を破ることを免れなかった。例えば、「直齋」詩集類に項安世の『平庵悔稿』と

仲至の『東平集』を収録しているが、これらは単純な詩集でなく、実は詩文合集であるから、馬端臨は別集類に修正して分類した。同じように、陳振孫は『孟子』を子部儒家から分けて経部に上げて、論語類と合わせて「論孟」という分類を初めて立てたが、馬端臨は更に孟子類を独立して論語類と並列させた。しかし、陳振孫は余允文の『尊孟弁』を「直齋」儒家類に入れてしまった。これは陳氏の粗忽であろう。故に馬端臨はこれを孟子類に修正して分類した。

四 書物による分類の修正

(一) 内容と真偽

以下は主に偽書に関する問題である。例えば、晏子は一般的に儒家の人物と見なされ、その言行録である『晏子春秋』も儒家類（『崇文』や『直齋』など）に入れられているが、『郡齋』は唐代の柳宗元の『弁晏子春秋』に「墨子の徒に齊人なる者有りて之を為る」とある意見によって、これを子部墨家類に入れた。馬端臨も『郡齋』に従ってそうした。また、『郡齋』史部雜史類に『碧雲駟』を記録したが、『直齋』と『経籍考』ではこれを子部小説家類に入れた。その理由はこの書は魏泰が梅堯臣の名を用いた偽作であり、その記事は荒唐で史実ではなくて虚構の小説にすぎないからである。そのほか、歴史上にある書の原本はすでに逸失し、後世の偽作はその書名を偽称したという「同名異書」の問題も、分類に影響する原因となる。例えば、『郡齋』経部経解類に『三墳書』を記録して、それが宋代の張商英の偽作と見なしたが、陳振孫は『左伝』昭公十二年に出る「三墳、五典、八索、九丘」がみな『尚書』と同じような古史であるから、これを経部書類に入れた。馬端臨は陳振孫の意見を承けてそうしたが、『四庫総目』は「三墳」という書名からもとと尚書の類に属しているが、偽作の「三墳書」の内容は実に『連山』、『帰蔵』、『乾坤』という「三易」に託したから、それを経部易類に付した。同じように、陳振孫は『孔子家語』を王肅の偽作と見なし、孔安国によって整理された孔壁中書（もともと『論語』と同源）ではないから、これを経部論語類から取り出して子部儒家類に入れた。『四庫総目』も同様である。『経籍考』は『直齋』によらず『郡齋』と同様に経部論語類に保存した。もちろん

ここに述べている『三墳書』と『孔子家語』とは、確かに偽作であるかどうか学界でもまだ論争があるが、いずれにしても、『兩書は歴史上において偽書と見なされて分類上に相違をもたらしただことは疑いがないのである。

(二) 地位と流伝

既に論述したように、分類の排列は直接的に書物の学術的地位の高低を反映している。これを逆に言えば、もしある書物の地位に著しい変化があれば、その分類も往々にしてそれに従って変化する。これは時代につれて書物に対する認識と価値判断が変化しているからである。書物の地位の変化はもちろん下がるのと上がるの二つの情況がある。下がる場合は一般的に偽作と見なされたり（前述の『晏子春秋』、『碧雲駝』など）、或いは封建的正統觀念によって軽視された書物である。例えば、子部小説家の書物はもともと史部に入れられて後に修正された。『穆天子伝』はその一例である。上がる場合は一般的に書物の価値が統治者によって重視された場合である。例えば、李延寿の『南史』、『北史』はもともと宋、齊、梁、陳などの南北朝の正史に基づいて再編纂したもので、一般的に雑史類（『崇文』や『郡齋』など）に入れられて、その地位も正史より低く見なされたが、宋代（特に南宋）に至り、その価値は次第に学者（司馬光、陳正敏ら）に認められて地位も高くなって、ついに官方によって正史と規定された。したがって、馬端臨はこれを雑史類から正史類に引き上げた。もう一つの好例は、『通典』と『唐会要』などの政書（『文獻通考』自身もそれに属する）は、その類別の編纂方式によって一般的に子部類書類に入れられたが、陳振孫に至ってその内容は「古今制度沿革」（『通典』）或いは「典故」（『会要』）であり、類書と異なるということによって、これを引き上げて史部典故類に入れた。^①馬端臨はこれによって政書を史部故事類に入れた。清代に至って官方は政書の治国教化に役立つ作用を認めて、『三通』を統修して『九通』とし、官修の『四庫總目』も史部に政書類を設けて政書をこれに入れた。

五 時代学術思想の影響

前文でもしばしば時代学術思想の影響に言及したが、ここでは馬端臨自身の思想とその『経籍考』小学類における

表現を中心にしてその学術的意味について論述したい。

『宋元学案』巻八九「介軒学案」に馬端臨を朱子の再伝弟子の曹涇の門下に列して、曹涇の伝記でこう述べている。「(曹涇) 博学知名にして、馬端臨嘗て之に師事す。」と。同巻馬端臨の伝記に、「時に休寧曹涇、朱子学に精詣し、先生、之に従ひて遊ぶ。師承自るところ有り。」⁽¹⁸⁾と云うように、馬端臨が朱子学の伝承を受けたことを指摘している。同巻に編纂者である王梓材はこう言う。「梓材謹んで案ずるに、(中略) 其(馬端臨)の程登庸と友善にして、並びて朱学を為すを以てして、是の巻に附入す。」⁽¹⁹⁾と。これによれば、馬端臨は程登庸らの学者と付き合つて朱子学を信奉していたことが分かる。このことは『経籍考』において馬端臨が程朱理学、特に朱子の言葉も多く吸収して、その立論の主な根拠としていることに現れている。以下、小学類所収の倫理入門書の分類修正を具体例として分析したい。

歴史上から見れば、「小学」とは、もともと王宮のそばにあつて、王侯、士大夫などの子弟を八歳より数年間学問させる施設であり、そこで教えた六芸(『周礼』「地官・保氏」に礼楽射御書数)を指したこともある。のち『漢書』芸文志以来、文字・音韻・訓詁の学を指すようになって、『説文解字』、『広韻』、『爾雅』などが小学の典籍とされるが、時代に伴つて「小学」の名義と内容には大きな変化が生じた。「直齋」子部儒家類に「童蒙訓」(呂本中)、『少儀外伝』(呂祖謙)、『弁志録』(呂祖謙)と「小学書」(朱子)を記録している。その内容とは、例えば、『小学書』は学童の課程を示した書として、洒掃・応対・進退などの小節(家庭内での道德的徳目)から、修身道德の格言、忠臣・孝子などの事跡までを集めたものである。この種類の書物は儒家の道德倫理規範の入門書として、『漢志』以来一般的に儒家類(『弟子職』)に入れるが、朱子に至つて特にこれらを「小学」と見なした。馬端臨は朱子の意見によつてこれらを『経籍考』経部小学類に分類した。⁽²⁰⁾ 夫はこれは先秦時代(『漢志』以前)の小学教育(上述の『周礼』地官保氏)の伝統を回復したと同時に、朱子学における「三綱領」、「八条目」などの治国平天下の道理を説いた「大学」の説と相い表裏して、修身立命の基礎を築いて、修身と学問の前後次序(「下学而上達」、「先事後理」)を規定したものである。

これらの倫理入門書（『弟子職』を含む）のほか、『経籍考』小学類所収の書物の種類は非常に雑然としており、伝統的な文字、音韻、訓詁などの小学の書物以外に、馬端臨は『直齋』目錄類から金石の著作（洪适『隸釈』、鄭樵『石鼓文考』など）、『郡齋』と『直齋』類書類から読字啓蒙書（唐李瀚『蒙求』、宋徐子光『補注蒙求』など）、『直齋』雜芸類から書道著作（前掲の法帖著作）などの書物を、すべて小学類に分類して修正した。

しかし、上述の分類の修正は馬氏の独創ではなく、歴史上から見ればすべてその先例がある。『四庫総目』卷四〇經部小学類の小序（註）中に指摘しているように、金石著作を小学類に入れるのは『隋志』から始まり、書法、書品などの書道著作を芸術類から小学類に入れるのは『新唐志』から始まり、『弟子職』などの倫理入門書を小学類に入れるのは趙希弁の『読書附志』から始まり、『蒙求』などの読字啓蒙書を類書類から小学類に入れるのは晁公武の『郡齋』から始まったのである。ただ、『四庫総目』が、直接に指摘してはいないが、批判を加えて「小学類」から取り出したこの四種類の書物は、ちょうど『経籍考』經部小学類にすべて備わっている。『経籍考』は前代書目の「小学類」の集大成と言えよう。もちろんこれは偶然ではなかった。実は『経籍考』と『四庫総目』の小学類の違いは、時代の学術思想による忠実な反映である。馬端臨はその時代までの学術を総括して宋代に興った金石学、程朱理学、蒙学教育などに特に注意を払った。小学類はただその集中的な表現にすぎない。しかし、清代に至って「宋学」に反駁して經書に対する忠実な解釈を行った考証学（所謂「漢学」）が盛んになり、經学の基礎としての文字、音韻、訓詁の伝統的小学も重視され、ついに「經学の附庸」の地位から時代学術の中心にもなった。したがって乾嘉考証学の結晶としての『四庫総目』の小学類はただ文字、音韻、訓詁類の書物だけを記録し、「金石」、「幼儀」、「筆法」、「蒙求」の書物は切り離して各々元の類に帰している。これによって『漢志』の伝統を回復し、「小学類」も純粹なものになったのである。

おわりに

本稿は分類体系、分類者、書物、時代思想空間の四つの方面から、『経籍考』における分類の修正の原因を帰納的に

分析し、更にその背後にある学術的意味を探索した。馬端臨は『経籍考』の中で前代書目を輯録する過程においてその分類に対して修正を行ったが、これは表面上の書物の類別だけでなく、往々にして学術の時代変化を反映していることがわかる。更に目録学と学術史を分析することによって、特に古籍四部書目の集大成である『四庫総目』と対照すると、『経籍考』における分類の修正は往々にして「過去をうけて未来を開く」一環と言うことができる。この点から『経籍考』は中国近世の最も詳細な解題書目として、宋代以前の目録書の集大成と言っても過言ではないだろう。

『経籍考』は『文献通考』の「文」（典籍）、「献」（賢者）、「考」（考訂）の三者一体の編纂原則を貫いており、更に「其の著作の本末を記し、其の流伝の真偽を考へ、其の文理の純駁を訂す」という編纂目的（弁章学術、考鏡源流）を達成するために、馬端臨は時代の学術思想に応じて忠実に記録する一方で、書物の性質と特徴・流伝と真偽をも論述し、更に朱子学の立場に基づいて書物の内容と背後にある学術思想をも検討した。白寿彝が『経籍考』は目録書の形式として「学術文化史」の任務を負う、と指摘しているように、『経籍考』は一般の文献資料集を超えて実に「意識形態」に関する著作でもある。故にその編集過程と学術的意味の両方を更に分析する必要がある。これは『経籍考』自身だけでなく、中国目録学史及び学術思想史の発展に対する理解にもある程度参照できる価値があると言えよう。

注

- (1) 『文献通考』「自序」、「存于近世而可考」。(元)馬端臨『文献通考』、北京中華書局一九八六年、第九頁。
- (2) 筆者が作った『経籍考』全文分析データベースの統計によると、『経籍考』には凡そ三九三八条目を記録され、「教書一録」(一つの条目には複数の書籍がある)の書物約四〇九部を加えて、「一書重見」(同じ書物は二つ以上の類別に現れる)の書物約百部を差し引き、実際に約四二〇〇余種の書物が記録されている。
- (3) 呂夷簡等撰『三朝国史芸文志』(太祖、太宗、真宗)、王珪等撰『兩朝国史芸文志』(仁宗、英宗)、李燾等撰『四朝国史芸文志』(神宗、哲宗、徽宗、欽宗)、不著撰人『中興国史芸文志』(高宗、孝宗、光宗、寧宗)。
- (4) 王重民は最初に『中国目録学史論叢』に『経籍考』のような「鈔輯序跋、史伝、筆記和有關的目録資料以起提要作用」(『中

「国目錄学史論叢」、中華書局一九八四年、第八〇頁。の編著方式を「擬称之為輯録体」(同上)と命名し、古代以来の「敘録体」(「四庫総目」など)と「伝録体」(「七志」など)と鼎立させた。

(5) 例えば、昌彼得、許世瑛、雷曉慶、桂羅敏は、「経籍考」の分類体系は「直齋」に基づいて前代の書目を損益したものと論述した。張宗泰、劉石玉、雷曉慶はその分類項目の設置の得失を討論した。以下の論著などを参照。楊寄林「文献通考・経籍考」分類体系発覆」、劉乃和主編「洪皓馬端臨与传统文化」、中国青年出版社一九九七年。桂羅敏「文献通考・経籍考」分類法新探」、江蘇圖書館學報」二〇〇一年第四期。雷曉慶「文献通考・経籍考」分類體系得失略論」、晉陽學刊」一九九二年第三期。劉石玉「文献通考・経籍考」分類探析」、四川圖書館學報」一九八七年第二期。

(6) 「郡齋」(衢本と袁本を含む)全文に「一九九七条の書目があり、その下に「一九九六条の解題があり、「経籍考」にその「一四三七条の解題を取り入れる。「郡齋」全部の解題の条数の九六%を占め、ほとんどすべての解題を保存していることがわかる。

(7) 現行の殿本「直齋」全文に三〇九三条の書目があり、その下に三〇七六条の解題があり、「経籍考」にその二八一条の解題を取り入れる。「直齋」全部の解題の条数の九二%を占める。また、清代四庫館臣が「永樂大典」に「直齋」(殿本)を輯録する前には、「直齋」の単行本はほとんどない。また、山内正博は、「経籍考」所載の「直齋」は殿本より「直齋」の原本に近づくと論証した。そうであれば、「経籍考」の校勘価値はいっそう重要だと言えよう。氏の「文献通考経籍考と直齋陳氏書録解題——四庫全書総目批判序説」を参照。「史学雑誌」第七五編第九号、東京大学史学会一九六六年十月、第五一〜六九頁。

(8) 「按、(中略)蓋有実故事而以為雜史者、実雜史而以為小説者。有「隋志」以為故事、「唐志」以為伝記、「宋志」以為雜史者。若一考訂、改而正之、則既不欲以臆見故前史之旧文、且所錄諸書、蓋有前史僅存其名、晚学実未嘗見其書者、則亦無由知其編類之得失、是以姑仍其旧。而於所錄先儒議論諸書本末、則不詳加考訂、但以類相從、而不盡仍前史之旧云。」華東師大古籍研究所標校「文献通考・経籍考」(以下、「経籍考」と略称)上冊、華東師範大学出版社一九八五年、第五三九頁。

(9) 「経籍考」上冊、第三二二頁。

(10) 卷二史部偽史霸史類に引く鄭樵の言葉、「夾漈鄭氏曰、古今編書所不能分者五、一日伝記、二日雜家、三日小説、四日雜史、五日故事。凡此五類之書、足相紊乱。又如文史與詩話、亦能相蓋。」「経籍考」上冊、第五三九頁。また、注(8)を参照。

(11) 張舜徽「漢書芸文志通釈」を参照。華中師範大学出版社二〇〇四年、第二四三頁。

(12) 卷一五「考古図」の解題の後の按語を参照。「経籍考」上冊、第三七五頁。

(13) 卷一七「書苑菁華」の後の按語を参照。同上、第四三三頁。

- (14) 『経籍考』卷二に引用する鄭玄の言葉。「編書之家、多是苟且、有見名不見書者、有看前不看後者。」同上、第五三九頁。
- (15) (宋) 陳振孫撰、徐小巒、顧美華点校『直齋書錄解題』、上海古籍出版社一九八七年、第五五五頁。
- (16) 『経籍考』卷二八「陳氏曰、(中略) 按通典載古今制度沿革、会要專述典故、非類書也。」『経籍考』上冊、第六八七頁。
- (17) 黄宗羲原著、全祖望補修、陳金生、梁運華点校『宋元学案』第四冊、(北京) 中華書局一九八六年第一版、第二九七二頁。
- (18) 「時休寧曹涇精詣朱子学、先生從之遊、師承有自。」同上、第二九七七頁。
- (19) 「梓材謹案、(中略) 以其(馬端臨) 與程登庸友善、而並為朱学也、附入是卷。」同上、第二九八〇頁。
- (20) 『経籍考』の中に引用する朱子の言葉と文章は二七九条に達し、『直齋』と『郡齋』に次ぎ、第三位に立っている。また、書目以外最も多く引用される学者である。その内容は主に『朱子語録』(『朱子語類』の前身)と『晦庵集』(朱子文集)に出るものである。その引用文は経部(特に礼類と易類)に一番多く、次に子、集、史部である。
- (21) 卷一七『小学書』の下に引く朱子の言葉、『朱子語録』曰、修身之法、小学備矣。後生初学、且看小学之書、這個是做人底樣子。学之小大雖不同、而其道則一。小学是事、如事君、事父、事兄、處友等事、大学是發明此事之理。游倪曰、自幼既失小学之序、願授『大学』。先生曰、授『大学』甚好、也須把小学書看、只消旬日工夫。』(『経籍考』上冊、第四三六頁。)この一段は現行『朱子語類』卷第一百五・朱子二・論自注書、卷第七・学一・小学と卷第一百一十八・朱子十五・訓門人六の五条にある。
- (22) 四庫全書研究所整理『欽定四庫全書總目』、(北京) 中華書局一九九七年、上冊第五二六頁。
- (23) 清代考証学の開山である顧炎武が「説九經自考古始、考文自知音始」(亭林文集卷之四「答李子德書」と提唱し、その『音学五書』などの著作を範として示した後、小学に対する研究は日増しに盛んになった。特に乾嘉時代に至り、惠棟、戴震、王念孫、王引之、段玉裁らの小学に長じている経学大家が輩出し、当時の学界の主流となった。
- (24) 金石書物の分類は複雑で『四庫總目』には史部目錄類・子部譜録類・經部小学類の三つの類に付いている。四庫全書研究所整理『欽定四庫全書總目』、(北京) 中華書局一九九七年、上冊第一一五一頁。
- (25) 『文献通考』「自序」、「記其著作之本末、考其流傳之真偽、訂其文理之純駁。」北京中華書局一九八六年、第九頁。
- (26) 白寿彝『中国史学史論集』、中華書局一九九九年、第五〇〇頁。